



集詩のテーク

石躍信夫訳



ゲーテの詩集

石躍信夫記

崇文館刊



集詩のテーマ



・ 美 ・

譯夫信躍石



ゲエテの詩集

石躍信夫譯





崇文館刊





集詩のテーダ

石躍信夫記

序

詩人にして最も豊かな天分を發露させたヨハン・ナルフガング・ゲエテは西曆千七百四十九年八月二十八日獨逸のフランクフルト市に呱呱の聲を擧げた。十七歳の時ライプツヒ大學の法科に入り、法律を學んだが趣味なく常に文學

の研究に耽つた。それでも七十一年には法學士の稱號を得て、翌年エッツラルの高等法院に入つた。而して後イマアル公カルル・アウグストに聘せられて公の秘書官となり、遂に公の推薦で、當時の皇帝から貴族に列せられた。然も富と名譽をを獲得した彼は、生涯その天分を専ら藝術の勞作に費し、千八百三十二年三月八十三歳の高齡を以て永眠した。

即ち茲に収めたゲエテの詩は、最も代表的なもので、最も愛誦するもののみを選んで譯したのである。尙ほこの集に收むべくして收め得なかつたゲエテの詩は、まだ無數にあるが、この小さな詩集の中にもゲエテを代表すべきものは存在してゐると思ふ。たゞ詩の翻譯が獨自のもので、殆んど邦語に移すのは不可能なものである限り、ゲエテの精神が幾分でも此の拙い譯に

依て表白されて居れば、此上ない幸である。

大正十一年十月

譯者

目次

(抒情小曲)

三	月……………	三
頓着のない女へ……………	六	
わが願ひ……………	八	
別離……………	一〇	
良夜……………	一三	

和める海……………一六
 夏……………一八
 最初の恨み……………二二
 シチリヤ人の歌……………二三
 フィンランドの歌……………二五
 花の言葉……………二八
 似合つた夫婦……………三〇
 空　な　死……………三二

愛らしき娘……………三三
 思ふ姿に身を變へて……………三六
 總　　體……………四四
 新たな戀と新たな生……………四六
 厚顔で快活で……………五〇
 逢ふ瀬と別れ……………五二
 眞實の樂しみ……………五七
 憂ひの樂しみ……………六六

憧 憬……………六八
 山 よ り……………七四
 夜 の 調 べ……………七六
 人 嫌 ひ……………八二
 お前が其氣なら……………八三
 幸福と夢……………八四
 絶わ間なき戀……………八七
 二つの世界の中にて……………九〇

墓 の 銘……………九二

(新 詩 篇)

詩神の子……………九七
 新らしき春……………一〇三
 荒野の薔薇……………一〇八
 五月の歌……………一二三
 溜 息……………一二六

楽しい航海	一八
忠告	二〇
涙の慰安	二二
秋の恵み	二七
兵士の慰安	三〇
明年の春	三三
四月	三六
すみれ	三九

旅の歌	一四二
悶	一四六
愛する人と共に	一四八
親しき讀者へ	一五二
希望	一五四
お互ひ	一五六
ガニメツド	一五九
年の始めに	一六四

彈絃者……………	一七一
月　　よ……………	一七七
厚顔に痛快に……………	一八三
心の愁ひ……………	一八七
寶を求めて……………	一八九
處世術……………	一九五

雜　　篇

漁　　夫……………	一九六
美はしい花……………	二〇一
思　　ひ　　出……………	二〇四
少女の希望……………	二〇六
朝の悲しみ……………	二一九
夜の思ひ……………	二一九
花　　　　　婚……………	二三二
『若きエルテルの悲み』の後に……………	二三四

常に何處にも……………	二二六
水上の精靈の歌……………	二二八
永久に……………	二四四
人間の限界……………	二四六
プロメチウス……………	二五二
天才的の野心……………	二六一
現實に永遠に……………	二六三
運命……………	二六五

最善の道……………	二六七
世に處して……………	二六八

目次 (終)

戀
愛
小
曲

三 月

雪はちらく降つてくる

待つに待たれぬ時ぢやない

種々な花が咲き出すこ

種々な花が咲き出すこ

ふたりの心はごんなだらう

のまかに照る日の影すらも

矢張りの嘘を吐いたのか

さうせひこりで来るからは!

燕も矢張りの嘘をつく

燕も矢張りの嘘をつく

いくら春が来たこても

何んでひこりで嬉しからう?

それでもふたりが一緒になるころは

それでもふたりが一緒になるころは

いつしか夏が襲ひ来る

頓着のない女へ

あの^{オレンジ}橙を見て見たの？

あの木に垂れてる^{オレンジ}橙を

三月も早や過ぎ去つて

新しい花をつけて来た

あの木の下に寄添ふて

わたしは^{オレンジ}橙に言つて見た

^{オレンジ}橙よ、真赤に熟れた^{オレンジ}橙よ

甘い甘い^{オレンジ}橙よ

わたしは終にはゆすぶつて

まあまあ わたしの膝もこへ！

わが願ひ

おゝ 可愛い、娘さん

髪の黒い娘さん

何んで窓からのぞいてる？

何んで露臺バルコニーに立つてるの？

たゞ譯わけもなく立つてるの？

わたしの爲なら、おゝあなた

掛金はづして呉れたなら

わたしや何どんなに嬉しからう！

わたしや何どんなに躍り上らう！

別 離

眼と眼で別れを告げやうか

口では到底言へぬため！

耐^{こら}へられない、耐^{こら}へられない！

これでも以前^{もと}は一人の男子^{をとこ}だが

楽しい戀^{こひ}の遺物^{かたみ}さへ

今は嘆きの種^{たね}なる

あなた接吻^{きす}の冷かさ

あなたの握手^{てのり}の力なさ

そつと手出したあの接吻^{きす}も

あの時はごんなによかつたか！

あの嬉しさは春の日に

摘んだ堇^{すみれ}のやうだつた

けれぎ、あなたの爲めにこれからは
花輪に薔薇も入りはせぬ
世は春ぢやきてフレンツヘン
わたしばかりは秋ぢやもの！

良 夜

いま私はこの小さい家を抜けてゆく
私の戀人の住んでる家から
ひそかに足音を忍んで歩みゆく
暗くて淋しい森を通つて
月光は藪やぶや檜かしのの樹間このまから洩れ

風はざわざわと吹き渡り
樺の梢こすえはゆるぎ

甘たるい香は一面にひろがる

この美はしい夏の夜の

涼しさ溢れる愉快さよ!

お、夢見るやうな静けさ

實に心まで幸福に酔ふてるる

この楽しさこそは味ひ盡せない!

けれごも天よ、

あの娘が私にこの夜の一つを呉れたら

こんな美しい夜を

いくらでも私はおまへにやらう

和^{なご}める海

底知れぬ静けさは水中にひそみ

海は凝^こり身動きもしない

船頭は心も空に

静かな水の面を見つめてゐる

そよこの風さへもない何處にも！

恐怖に近い死のやうな静けさ！

見ゆるかぎり

波は滑かだ

夏

野も畑も

露の光に輝く！

草も樹も

眞珠の玉をつける！

茂みの中を

風が爽かに抜ける！
照り輝く日を浴びて
小鳥は高らかに歌ふ！

あゝ、されど

この低く狭苦しい

小さい室内に

日影をよけて

閉ぢこもりながら

愛する人を覗いてゐるのこくらべるこ

假ひごんなに美しからうが！

この世界は何の價値もない

最初の恨み

あゝ あの楽しい日を

誰が持つて來るのだ

あの初戀の日を

あゝ あの心のわくくする瞬間の

ひこ時すら誰が返して呉れやうぞ

私はさびしくも

この痛手を育む^{はぐく}

何時も新たな悲しみに包まれて

消へ失せた幸福を惜しんでゐる

あゝ、あの楽しい日を

誰が返して呉れやうぞ

あの心のわくわくする瞬間を！

シチリヤ人の歌

あなたの黒い愛^{いと}しい眼！

あなたが睨んだそれだけで

屋根は壊れて落ちませう

街も滅茶苦茶になりませう

そして私の胸中の

漆喰塗りの壁さへも

落ちたら何ぞ致しませう

ちよつこまあ思案をしてお呉れ！

フィンランドの歌

馴染のふかいあの人

戻つて来てくれたらば

あの唇くちびるに接吻きすしよう

たゞへ狼の血に染まらうが

若しまた指のさきが蛇ぢやきて

ぢつこ其手を握りませう

風よ！心があるならば

あんまり距離が遠い故

途中で少しは消ゆるこも

二人の話をついで呉れ

夏は早くこりこんで

長い冬に手なづけた

あの人と別れをするよりは

御馳走もいつそ食べないで

美味^{うま}い肉も忘れませう

花の言葉

摘んだ私のこの花が

あなたに言葉をかけますよ

何千度でも、いくらでも！

あゝ、私は千度も二千度も

何時でもあなたにお辭儀した

それから胸へ抱いて見た
千度、二千度、三千度！

似合つた夫婦

地から萌へ出た一本の

釣鐘草が早くから

野原に楽しさうに

可愛い、花を咲かせました

何時か小さな蜂は臭ぎつけて

蜜を吸ふのです、甘さうに
如何でせう、全く此ふたりは
似合つた夫婦ではないでせうか

空むだな死

小女よ泣け！この愛の神の墓石の前で
あゝ彼は何のわけもなく死んでしまつた
しかし死んだのは眞實か何うか知れない
何でもないこゝが彼を呼び醒ますから

愛らしき娘

逃けるやうに今また通つた
君はあの娘こを見て見たか？
あの娘こが私の花嫁ならば！

あゝ見た！ ブロンドの色の白い娘だね！

燕のやうに愛らしく飛び歩くんだね
巢でもこさへる燕のやうに

私のものだよ、可愛い娘

私のものだよ、綺麗な娘

けれぎおまへにや何かゞ飲けてるよ

恰度水を鳩が飲む時のやうに

唇尖くちぶらせて接吻きすをして呉れたらば

お前はもつこもつこ可愛からう

思ふ姿に身を變へて

魚だつたらよからうな

すばしこ 敏い元氣な魚のやうに

あなたが釣りに來たときは

その釣針にかゝらうに

魚だつたらよからうな

敏い元氣な魚のやうに

馬だつたらよからうな

それなら大切だいじにされるのに

車だつたらよからうな

あなたを運んであけるのに

馬だつたらよからうな

それなら大切だいじにされるのに

金だつたらよからうな

何時でもあなたに抱かれる

あなたが物を買ふときは

直ちきにも走つて戻らうよ

金だつたらよからうな

何時でもあなたに抱いだかれる

心變りはしませぬよ

何時でも花嫁氣分でゐたいのさ

誓かはひ交した仲ぢやもの

何うせ別れるこゝはせぬ

心變りはしませぬよ

何時でも花嫁氣分でゐたいのさ

年老けて血の氣なく

皺くちや爺になつたなら

あなたが私を嫌つても

殊更苦情は言ひますまい

年老けて血の氣なく

皺くちや爺になつたなら

いまあの猿になつたらば

悪戯いたづらざかりのあの猿に

あなたが如何に怒つても

たはむれて上げやうに

いまの猿になつたらば

悪戯いたづらざかりのあの猿に

羊の如く従順になれたらば

獅子の如く強くなれたらば

山猫の如き眼を持つてゐたらば

狐の如く狡猾になれたらば

羊の如く従順になれたらば
獅子の如く強くなれたらば

たごへ何^どの様にならうとも
あなたにこの身を捧^{ささ}げよう
王様の贈物でもあるやうに
さうかこの身を抱いてくれ
たごへ何^どの様にならうとも

あなたにこの身を捧^{ささ}げよう

然し私が今のまゝの私でも
さうぞこの身を抱いてくれ！
若しもそれで満足行かぬ時は
あなたのいゝやうに變へてくれ
しかし私が今のまゝの私でも
さうかこの身を抱いてくれ！

總 體

伶俐^{リコウ}で優しい愛嬌者は

何處へ行かうが歓迎される

その男は上手な頓智^{トンチ}と戯談^{ゼウタン}で

多くの女を迷はせた

けれごあの男に腕力^{ウデチカラ}がなかつたら

誰が何うして保護するか？

それから彼に尻^{シラ}がなかつたら

何んで氣高い男は坐られる？

新たな戀と新たな生

心よ、心よ、何うしたさいふのだ？

何故なぜに其様にわくくしてゐるか？

何さいふ不可思議な新生よ！

これがお前こは何うして思へよう

お前の愛したすべては消けれ失せた

お前を苦しめたものは消けれ失せた

お前の勤勞いそしみや平安は

あゝ何んでこの様になつたのか？

限り知れぬ力でお前を捕捉するは

あの若い花みたいな面影なのか

あの愛いとしい姿なのか

あの眞實まことな愛この籠かごつた眼またざしなのか？

私は慌て、彼女から離れるために
懸命になつて逃げようとはするが
直に彼女の許へ

あゝ、また引戻される

振り切るここの難しい

この魔の紐をしつかり

愛しい強い少女は握つてる

いくら逃げようとしたことも

既に私は彼女の魔術の圈にかゝり

彼女の心のまゝに生きねばならぬ

あゝ、何ぞいふ激しい變りかた!

戀よ! 戀よ! 私を放してくれ!

厚顔で快活で

戀の苦しみを私の心は嘲笑ふ
優しい悩みも甘い悲しみも
ただ強いものだけを私は知る
燃ゆる眼を強い接吻くちづけを
苦痛を交へた喜びにより

哀れなものよ、勇氣を出せ！
少女、なんぢの清い心には
苦しみを棄て、喜びだけを抱け

逢ふ瀬こ別れ

胸は波うてぎ、慌てて馬へ！
考へるひまもなく馬は飛ぶ！
夕ぐれは早や地上に眠りを與へ
山々は夜の帷とまりで閉ざされてゐた
檜の樹はもう霧につままれ

巨人のやうにも起立してゐた
闇は林の蔭から
數知れぬ黒い瞳で覗いてゐる

月は山みたいな雲間から
霧押しわけて哀れな光りを投げてゐた
風は輕やかに翼を動かし
耳の近くで凄じい音をたてる

夜は數知れぬ怪物を吐き出せご

私の心は健かに歡喜する

私の脈には何こいふ焔があるこごよ!

私の胸には何こいふ火があるこごよ!

お前に出逢へば、その喜ばしさは

その甘い眼から流れ入る

私の心はお前に寄り添ひ

お前のために波を打つてゐる

薔薇色の春らしい氣分は

その可愛い、顔をつゝんでゐた

お、神よ! その優しい仕業は^{しわざ}

これまで私が望み得ないものだった!

だが、あゝ朝日は既に昇り

別れは私の胸を亂してしまつた

お前の接吻は何こいふ快樂だらう！
お前の眼には何こいふ苦痛があるだらう
別れる時のお前は佇んで眼を伏せ
泣き濡れた眼で私を見送つてゐた
けれご愛せられるは何こいふ幸福だらう！
神よ 愛するは何こいふ幸福だらう！

眞實の樂しみ

娘の心を得たい考なら
その膝元に金を積んだこて何にならう
贈らねばならぬのは愛の喜びだ
だがそつちで^{ため}驗して見ろ
金が民衆の聲を購ひ得たこしても

たゞ一つの心ばかりは買ひ得ない
それでも一人の娘を買ひたい氣なら
自分で行つてやるがいゝ

おゝ若者よ

清らかな紐で縛られてゐないのなら
おまへは自ら自身を縛つて見ろ
人は眞實に自由に生きて行かれる

それでも束縛されずには居られぬ
たゞ一人の女に無中になるこゝさ
さうすりや女の心は愛が溢れる
そしてから愛の紐に縛られてもいゝ
義務で縛られても仕様がなから

若者よ！ はじめに考へよ
そして身の清らかな

心の美は^{うる}しい一人の娘を選ぶことだ

娘は娘でお前さんを選ぶだらう

するこゝ前さんは幸福さ、私みたやうに

私はこの技倆を知つて

一人の娘を選んだのさ

この美はしい結婚は幸ひに

牧師の祝福のやうな煩ひも受けずに済んだ

彼女は私の機嫌をこるほか苦勞なく

私のために美しい化粧をするばかり

私のそばでは何時も我が儘で

世間の見た眼は温順しい女さ

二人の燃いた情は月日にも冷めなくて

彼女は自らの弱い権利を放棄する

さうして女の愛は何時も聖母のやうだ

私は常に感謝せずには居られない

私は何の不足もなく楽しむ

彼が優しく微笑む時

また食事しながら愛してゐる男の足を

自分の足の踏臺にする時

林檎に齒がたをつけて呉れる時

飲みかけの盃を呉れる時

或は私が接吻くちづけしようとする時

一寸拒むやうな真似をして

不斷は見せもしない胸をはだける時

それから女が静寂とした楽しい時

また私と一緒に戀の話に耽る時

私は彼女の口から物を言つて貰ひたい

一言でも、接吻は望まな

彼女は常に新たな魅力を投げる！

その身に人知れぬ智恵が潜んでゐて
彼女に申分はないが、たゞ缺點は
私を愛してゐるここだけだ

尊敬は彼女の足下に私を跪かせる
喜悦は彼女の胸の中へ躍り入れる
若者よ！ 見てくれ、これが楽しみなのだ
賢くなつて、この楽しみを味へ

死は何時かはお前を彼女の傍から
天使の歌ふ聲につれて
樂園パラダイスの喜びの中へこ誘ふが
お前は些かもその移りゆくのを覺わない

憂ひの樂しみ

乾かさずに 乾かさずに

永しへの戀の涙！

おゝ たゞ次第に乾いた眼にこそは

この世は如何に荒れ果てゝ見ゆるこそよ！

乾かさずに 乾かさずに

不幸な戀の涙！

憧^{あこ}

憬^{がれ}

私の氣をこんなにさせるのは何でせうか？

私を誘ひ出すのは何でせうか？

この家からも、部屋からも

出て來い出て來い誘ふのは？

彼方の山の圍りには

雲がなびいて居りますよ！

彼方へ行つて見たいのです

早く行つて見たいのです！

鴉の群れは列くんで

飛んでゆきます

あの群れに這入つて

私も後から行きませう

いつか山や城を

後へ後へこしてゆけば

下には彼女の姿が見えませう

そしたら静かに私は覗きませう

静かに彼女はやつて來ます！

私は直きにかけて行きませう

囀る小鳥の眞似をして

森の木陰のほこりまで

彼女は静かに立止まり

耳を澄ましてにつこりこ

ひこり思ひに耽るのです

『あれあれ、あのやうに優しく歌つてるわ

わたしのこゝを歌つてるわ』

夕日が山の頂きを

金色こんじきに染めるこき

ぢつとそれをば打眺めつゝ

思ひに耽る美しい人は

小川の岸邊をゆるやかに

牧場に添ふて歩いて行きます

するこ道は次第に暗くなつて

もう見ゆなくなつてしまひます

その時わたしは姿を不意に現はすのです

輝く夕べの星みたやうに

『あのやうに遠く、あのやうに近く

きらめいてゐるのは何でせう？』

この言葉にあなたが驚きながら

星かけを見入るこきに

私はあなたの足もこに横はります

それで私は幸福です！

山より

愛するリリーよ

若しも私がおまへを愛してなかつたら

この景色も私には

何の楽しみがあらうぞ！

それからリリーよ

若しも私がおまへを愛してなかつたら
行く先々にこんな幸福を見出せようか？

夜の調べ

おゝ そのふわふわとした寢床に
うつらうつらと夢みつゝ

半ば耳を傾けて

私の琴の調べと共に

眠りにつけ！

この上おまへは何が欲しいのか？

琴の調べにつれて

無数の星の群は

永しへの感を祝福しよう

眠りにつけ！

この上おまへは何が欲しいのか？

その永遠の感は

すつかり私の心を高める

この雑音の巷から

眠りにつけ！

この上おまへは何が欲しいのか？

この雑音の巷から

すつかり私を遠ざけて

清涼の氣の中に私を追ひこめる

眠りにつけ！

この上おまへは何が欲しいのか？

この清涼の氣の中に追ひこめたおまへよ

せめては夢の中だけでも耳を貸しこくれ

お、そのふわふわとした寢床の上で

眠りにつけ！

この上おまへは何が欲しいのか？

人嫌ひ

彼は始め鳥渡の間は

晴れやかな顔をして

腰かけてるが、ふと急に

顔一面を曇めてる

恰度梟のやうに

何うしたと言ふのかい？

戀か或は氣まぐれか？

あゝ、その兩方に違ひない！

お前がその氣なら

財布の口を締めてばつかりる男

それぢや誰たあれもよい事はして呉れぬ

手は自らの手によりて洗はれる

取る氣があるなら出せよ出せ！

幸福と夢

よくお前はこんな夢を見た

二人連れ添ふて

お前は妻となり

私は良人となり

祭壇の前へ赴く夢を

お前が心をゆるすとき

心ゆくまで接吻くちづけを

私はお前の口から貪むさぼつた

あの二人が味ひ得た

純なる幸福

少からぬ間の歡樂も

過ぎゆく時の力と共に流れ去る

あゝ歡樂すらも何になるか？
燃ゆるやうに熱い接吻くちづけも夢も消ゆる
思へばあの楽しさも接吻と同じこと

絶え間なき戀

雪や雨や風に向ひ
谷間の水氣を潜り抜け
霧のなかを
何時も突進しながら
慇ふひまさへもなく！

もつこ苦しみに

身を置いて見たい

人生の様々の楽しみに

耽つてゆくよりも

あらゆる愛情は傳はる

胸から胸へ

あゝ、それが何うして

こんなに苦しみを與へるか！

いつそ逃けて見ようか？

森へでも行つて見ようか？

それも皆、無駄だらう！

人生の王冠よ

絶え間ない幸福こそは

戀の他にはありはせぬ！

二つの世界の中にて

たゞ一人の女に所有せられ

たゞ一人の男を大切にするのは

何んぞ心丈夫なこそだらう！

リダよ！ 最も手近にある幸福よ

キリアムよ！ 最も美しい空の星よ

私の今日の境遇は

おまへたちの恵みだ

その日その年はすべて消ゆ去れど

あの時にこそは

私の全價値が及んでゐるわけだ

墓の銘

少年のころは内氣で氣儘で
青年のころはお洒落で氣位高く
中年になつて働きに精出し
老境に這入るゝ無頓着で氣まぐれだ！
おまへの墓石には斯う讀める

これ實に一個の人間であつた！

自然と人生

詩神ミユウズの子

野を越へ森越へ

ぶらぶらと

笛で自分の歌を吹き

辿り歩いて日を送る！

周囲のものは皆すべて

歌に調子を合はせつゝ
拍子をこつて踊りゆく

庭の草花のはじめての
樹に咲く花のはじめての
花が待つ間もなくて咲き出すこ
わたしの歌に會釋する
さうして冬が來たときは

またもわたしは夢を歌ひ出す

わたしは遠くでそれを歌ふのだ
底の見えない氷の上で
するこ冬でも花は美しく咲く！
この花がまたなくなれば
新らしい喜びが出てくる
畑の出來た丘の上に

菩提樹の下に遊ぶ

子供の群に出逢つたら

皆んながごつと浮かれ出した

馬鹿な息子も歌ひ出した

賢い娘も踊り出した

わたしの笛の音とこもに

あなたはわたしの足に翼を呉れて

谷間つたふて丘越ゆて

この愛し子に旅をさせるけご

もろくの優しい詩神よ

わたしたちの身は

何時になつたらば

あなたの胸に休めるのか？

新らしき春

楽しい時節よ

もう来たか？

丘にも森にも

日はさすか？

小川は喜ばしさに

流れゆく

あれが牧場なのか？

あれが谷なのか？

青々とした心地よさ！

高くに見ゆる空の色！

湖水には

金魚が泳いでる

森には

色鳥囀り

のミかな歌は

ひゞき傳はる

緑の下から

花が顔を突出し

蜜蜂たちは

蜜を吸ひに来る

軽い雑音は

空気をふるはし

心地よい香りは

眠りへ誘ふ

いつか微風そよぎ
更に、はけしい音を立てるが
間もなく木の間に
消れてゆく

だが何時か

胸へ返つて来る

詩神^{ミユクス}たちよ、幸福を

運んで呉れ、私のために！

私に何んなことが起つたか？
知つてゐるか、昨日から
愛する姉妹たちよ
あれあれ彼處にあの人が！

荒野の薔薇

少年は薔薇を見た

荒野の薔薇を

爽かな朝のやうに若い美しさを

よく見るために近寄つて

少年は眺めた、嬉々として

薔薇よ、薔薇よ、紅薔薇よ
荒野の薔薇よ

少年が云ふには

『曠原の薔薇よ、僕がお前を折つてやらう！』

薔薇が今度は云ふには

『そしたら私は刺しますよ』

忘れられない程いたく

折られたくはないからさ』

薔薇よ、薔薇よ、紅薔薇よ

荒野の薔薇よ

悪い少年は折つて見ました

荒野の薔薇を

すると薔薇は厭がつて刺したのです
しかし、いくら泣いても駄目でした

到頭薔薇は折つてしまはれた

薔薇よ、薔薇よ、紅薔薇よ

荒野の薔薇よ

五月の歌

小麥畑ばたけか麥畑

茨の垣の間にか

木立の中の草中か

何處へあの人行つたのか？

私に一寸言つてくれ！

私の愛いとしいあの方は
家の中にも居りはせぬ
大切な大切だいじなあの方は
外へ出たのか知れはせぬ
春の五月は美はしく
花咲き草は萌もはさかる
愛しい人は出て歩く
いそ面白く楽しくも

川のほこりの岩かけに
はじめてのあの接吻きすを
彼女が與へた草中に
何かが見ゆる！ あれかしらん？
堇の花には眼もくれず
哀れにも堇を踏みつけた
堇は折れてしまつたが
息の切れるまで喜んだ

『あの娘さんのためになら
わたしや死んでも恨まない
あの娘さんの足で踏まれて死ぬからは』

溜息

この世に酒がなかつたら
女の涙こいふものがなかつたら
あゝあゝもつこお金を貯めたんだ
こんなに方針も變らなかつた
こんなに馬鹿にもならなかつた

空想も描きはしなかつた
まだまだ幸福であつたらうが—。

楽しい航海

霧は散り

空は澄み渡り

風の神は

憂ひの紐を解く

微風はそよそよ吹き

船頭は働く

疾く！速に！

波を押し切り

遙か彼方も近づき

いつか陸は見ゆそむる！

忠告

何故おまへは先きへ先きへ行くか？

見よ、幸福は眼前に横はつてゐるではないか

だから確しかに促へる方法を學べばいゝ

幸福は手近くにある。

涙の慰め

何んでお前は其様に悲しいのか？

すべては喜悅に満ちてゐるのに

お前の眼を見るに直に氣付いた

お前が確に泣いてゐたのを

『いくら私が人知れず泣いても
それは私一個の苦しみに過ぎない
然も涙は私の心を軽くするほど
まことに氣持よく流れるのだ』

快活な友人はお前を招く

お、私達の胸へ來るがよいこ！
たごへお前が如何なるものを失はうこも

損失などは諦めてしまへ

『お前たちは何が慘めな私を心痛させるか
騒ぎ合つてゐては解らないだらう
だが、私は何ものをも失はない
たごへ私に欠乏したものはあらうこも』

それならば早く勇氣を出したがいゝ！

お前はまだ若いぢやないか
お前ぐらゐるな年の時分には
稼ぎ出す元氣も努力もあらう

『だが私は稼ぎ出す力もない
それは私には餘りに縁が遠すぎる
それは空の星のやうに
あれあんなに高く美しく輝く

星を取らうとして駄目なこゝ
その光さへ恍惚こ
眺めて楽しむほかはない
澄み切つた夜の空に

『私も恍惚こ長い間見られてる
絶えず晝間だけは
だから夜だけでも泣きたいのだ

涙の盡きてしちかふまで』

秋の恵み

葡萄の葉よ、青々こ

其棚を傳ふて

私の窓にまで上つて來い！

葡萄の房よ、のびのびこ

重り重りからみ合ひ

ごくごく大きくなつてくれ！

日影の母よ、別れには

必ずお前を育て、よ

恵み養ふ大空よ

風はお前を吹き抜けて

優しい月の吐息さへ

涼しくお前をして呉れる

然もおゝ！

幸
松

永遠へに力を興へる

愛の涙は此の眼から

漲れてお前を濕ほしてゐる。

兵隊の慰安

さうよ！ 何も不足はなからうさ

真黒^{まっくろ}けの娘に白^{しろ}い麵^{めん}麩^ぼ！

さうして明日^{あす}は他の町へ

真黒^{まっくろ}けの麵^{めん}麩^ぼに色^{いろ}の真白^{ましろ}い娘^{むすめ}さん！

明年の春

花壇の草が

伸びるとき

まつのき草は

ゆらゆらこ

雪のやうに真白い。

芽生めはえしたサフランは

燃ゆる火のやうに

緑玉エメラルドのやうに

眞赤な血のやうに

櫻草さくらそうが身をつくろつて

すましこむこ

ふざける莖は

懸命になつて身を隠す。

こつちを見ても生々いきいきこ

春らしく動いてる。

それでも庭で誇りがに

美はしく咲いたその花は

愛する人の優しい心根だ

その眼は常に變りなく

わたしに思ひを潜めつゝ

わたしの歌を呼んでゐる
わたしに口を軽くして
咲いた誇りを見せてゐる。

花の心よ

眞面目な折は親しく

たはむれの折は愉快に

薔薇と百合とを

夏が運んで来て

愛する人と競争したことも

それは到底駄目だらう。

四 月

お、眼よ、それで思つてゐることを言へ！

おまへは心しんから愛いとしいことを言つて呉れる

心しんから快い調子で言つて呉れる

また、おまへたちも同じ調子で訊いてくる

私はおまへたちをよく知り過ぎてゐる

今思ひに暮れてゐるこ

この濁りのない涼しい眼の中に

愛と眞實がゆたかに充ちてゐる

また物憂く見ぬ眼の下に

遂に正しく尊重の出来るやうな

眼附を發見した時は

その心は愉快な心持がするだらう

この暗號みたいな字の研究に

傍目もふらず耽つてると

自分で自分の眼の暗號文字を讀むやうに

おまへたちをも陥らせてしまふだらう。

すみれ

人知れず葉蔭にかくれて

野の中に莖が咲いてゐた

本當にやさしく愛らしく

いつか羊飼ひの娘が

いそいそと足取り軽く

心も軽くやつて来た

歌ひつゝ、牧場をさしてやつて来た

『あゝあ！』と董は自分で考へた

『この地上で一番美しい花になりたいな

あゝあ、たつた僅かの間あいだでも

愛する人に手折られて

胸に抱かれて死にたいな！

あゝあ、たつた僅かに
僅かに十五分の間だけ！』

あゝあ、ほんとにあゝあ！
娘はやつて来たけれど

旅の歌

山こ山この谷づたひ

下つて行けば谷間たにあひに

翼つばさにも似た足の音

歌ふがやうな其のひゞき

心まかせに行かうなら

楽しみもあり、道もある

努力するのも愛による！

生くるもおまへの行ひだ！

最早や束縛の紐も切れ

人に望みも消ゆ果てた

最早やわたしも定まつた

何どのやうなここに當らうこ

いまは別れてゆくがよい
憂ひ悲しむ寡婦のやうに
何時もいろんな人達の
力を頼りにするよりも！

凝ちっこすつこんでゐるも善し悪しだ
元氣を出して出るがよい！
頭や腕に清新の

力が籠つてゐるならば
心のまゝに何處でも
日中を侵して行かうなら
ごんな苦勞も消れてゆく
世界は實に廣いのだ
我々すべての氣のまゝに

悶
ね

何時も果てもない世界に向つて
國々を經廻り海を傳ふて
限りない空想は
岸邊を彷徨ふ！
經驗は常に新しく

心は絶えず憂ひに沈む
苦しみは青年の食物で
涙は幸福の歌である

愛する人と共に

われ汝をおもふ

海の彼方より

日光の照り返すとき

われ汝をおもふ

月光の泉に影を落すとき

われ汝を見る

遙かなる路上に

砂塵の舞ひ上るとき

深更の夜の狭き橋の上に

旅人の震へ立つとき

われ汝のこゝを聞く

かすかなる音をたてて

波の躍るを見るとき

静寂の森に憩ひては耳をそま欅つ

全く聲の沈めるとき

われ汝と共に在り

如何に距つるこも

われ汝と共に在り

落日と共に星はわれを照らす

おゝ 汝もきたれかし！

親しき讀者へ

詩人は沈黙してゐることを好まぬ
世の中へ自身をさらけ出す
讃められるも非難されるも
もごより覺悟してゐる！
如何なる人も散文で懺悔はしない

私達は潜ひそかにそれをやるのだ
たゞ詩神ミユウズのひつそりこした森でのみ

私が如何に迷ひ、如何に努力したか
如何に悩み、如何に生活して來たかは
この花輪の花を見よ
然も老ひの日も若き日も
徳も不徳も寄せ集むれば
また捨て難い歌こはなる

希 望

わたしの手でするこの事業

これを完成させるのは何こいふ幸福だ！

お、願くば途半みちばにして

疲れないこころを！

まこころ、それは空しい夢でもあるまい

今こそこの木は一本の幹ではあるが
やがては實を結び、影を残さう

お互ひ

あの人は何處に坐つてる？
何うしてあの様に嬉しいの？
離れてゐたつてその人を
しかこ抱いて揺つてゐる

立派な籠にあの人は
小鳥を一羽飼つてゐる
何時も自ら氣が向けば
すぐに外へ出してやる

小鳥はあの人を指をつついたり
また唇をつついては
飛んで翔かつてゆくけれど

直ぐその傍そばに戻りくる

さあ急いで戻つて来い

これがこの世の習慣だ

あなたが娘を愛してくれたらば

娘もあなたを愛しませう

ガニメツド

汝は朝の光もて

我が心を燃やす

お、春よ、愛いとしきものよ！

無数の愛の歡喜もて

我等の心に迫り来る

汝の永しへの懐しき

神聖な感情よ

数知れぬ美よ

われは汝を抱かん

この腕もて！

お、汝の胸に横はり

思ひ慕ふて悩むこき

汝の花、汝の草は

我が胸を押へん

愛しき朝風よ！

汝はわがこの胸の

熱き思ひを鎮めん

谷の間の霧の中より

鶯は優しくもわれを呼ぶ

赴かん！ 赴かん！

されど何處に？ お、何處に？

上に！ 上にのぼりゆかん

雲は下に漂ひ

我が燃ゆる胸に下り來る

妾わらはに！ 妾わらはに！

お、汝に乗りて下り行かん！

抱き抱かれ！

愛いとしき父よ

汝の胸へ上り行かん！

年の始めに

過ぎ去つた年こ

新しい年のまへに

運命は私達に與へる

幸福を楽しむために

過ぎ去つた年は

いこたやすくも

未來に希望をつなぎ

過ぎ來しあこを回顧させる

あ、悩み多き時は

既^もう過ぎてしまつた

苦しい眞實や

いこしい愛や

價値づける日は
私達を更に集めて
活氣ある歌で
私達の心を強める
残された楽しみや
消へ失せた苦しみの
手に手をこつて

思ひ出に耽る
あゝ、運命の
不可思議な攝理よ！
古くも堅い結合よ
新たな贈物よ！

強く打寄せて來る
幸福を感謝せよ

運命の總あらゆる恵みに

浴して感謝せよ

變化を樂しめ

快い本能を

純な愛情を

心に燃ゆる熱を！

過ぎ去つた年を

蔽ひ隠した幕の上を

悲しみつゝ

恐ろしさうに

眺めてゐる人もあるけれど

眞實な年は親しくも

私達の上に光輝を放つ

眼を開け、新しい年に

そは私達をも新たにする

恰も戀人同志の一組が
舞踏會の中で
姿を隠しては
また現れ出るやうに
愛情よ！
縛もつれた人生の
迷路から私達を
この年へ導いて呉れ

彈 絃 者

I

孤獨に立籠る人は
あゝ！ やがては獨りほつちになる！
人間は自らの生こ戀こを楽しみ
悩める人を思ふひまがない

さらば！ 苦しみに私を投げろ！

私がつゞの一度たりこも

眞の孤獨に陥つたならば

早やもう私は獨りでない筈だ

あの女の人は一人居るのかこ

愛人は耳欹て、靜に忍びゆく

晝夜なしに忍びゆく

おゝ 私がやつこ墓に埋められ

ひとり寂しく眠りにつく日こそは

寂しい私の苦惱も

寂しい私の悲愁も

私を永久とほに棄てるだらう！

II

私は軒並のきなみに忍び寄り

静にいとすとやかに佇めば
食物は優しい手で恵まれる
私が先へ先へこ歩くとき
誰でも私を幸福に思ふだらう
私の姿が目に入れば
やがて憂ひに沈むだらう
しかし私はある人が
何故に泣くのか分らない

III

泣きながら^{ぼん}麵麩を食ひ
悲しい^{よなく}夜々の床の中に
泣き明かさなない人たちは
神の力は分らない！

汝等は我々をこの世におびき出し

哀れなものに罪を犯させ
しかも苦惱の中へ放^なけてゆく
この世で犯した罪は報るのあるのに

月
よ

朧ろな光をもつて来て
森と谷とをつゝみ込み
やがては私の心さへ
おまへはすつかり融^とかすだらう

おまへの眼はおだやかに

私の庭に坐つてる

私の運命を憐れんでくれる友の

心おきない眼のやうに

喜びや憂ひの餘波は

私の胸にも響き來る

喜び憂ひの二筋のなかを

ひそり寂しく迷ひゆく

流れよ、流れよ、愛する河よ！

楽しい時は二度來ない

悪戯や接吻や眞實すらも

私には早やも消ぬ去つた

むかしは私も眞實の

貴、ものを持つてゐた！
だが苦しみながらも其中で
必ず忘れたことはない！

河よ、谷間に流れゆけ
休まずたゆまず躊躇せず
流れ流れて私の歌に
調子合はせて流れゆけ

冬の夜、波すさまじく荒立ちて
お前の水量みかさのふわるこき
春の青葉のめぐりにて
押し寄せ押し寄せあがるこき

憎しみもなく思ひなく
身を世間から遠ざけて

一人の友を胸に抱き

友と一緒に世の人の

まだ知らぬこころや意外なる

いろんなこころを楽しみて

夜更ふけに心の迷宮を

彷徨さまよひ辿るは幸福だ

厚顔に痛快に

女たちとは睦なごむ

男たちとは喧嘩けんかをし

金がない時は借りて来て

さうやら世渡りは出来るもの

酒飲みは一緒に澤山あれぞ

同居するのはあまりない

少い多いが反対なれば

これに越した痛快はない

相手の意地さへ強ければ

ごうせ此方がゆるんだ

席をばのづらぬ其時は

遠慮なくぎんぎん追ひのけよ

遠慮なく皆に妬ませよ

其手には入らぬここだから

さうして心の中で嘲笑へ

これが世渡りの初めて終りだよ

世間には斯うして調子を合はせ

この様な氣持で日を暮らせ
楽しいときや悲しいとき
この有難い世渡りを考へろ

心の愁ひ

おなじ道を變りなく
廻つて歩くはやめたらいい！
許せ、許せ、私の遣口ややくちを
さづけて呉れ、さうか私に幸福を！
置れようか？ 奮發しようか？

もうもう、失望はよしてくれ
若し幸福きふにしたくなければ
心の愁しみひよ、私を賢くしてお呉れ！

寶を求めて

懐中ふところさびしく心あせり
久しい間引きすられゆく
貧しさ以上の不幸なく
富裕にまさる幸福はなからう！
それから私はこの悩みを

追退ける爲め寶を掘りに出た

『私の魂はお前に與へる！』と

私は自らの血潮で認め^{した}た

かくて幾らかの魔の圈^わを描き

骨と藥草を集め寄せて來て

私は不可思議な火を燃やした

それから呪文も讀み終り

習ひ覺^わけた術により

勝手を知つた場所へ行き

古い寶を掘り始めた

夜は闇につままれて凄かつた

する空に輝く星の如く

遠方に一つの火が現れた

やがて遙か彼方から近づいて來た

十二時の鐘の鳴つたとき

早や何うするここも出来ない

間もなく四邊は明るくなつて來た

愛らしい童わらべの手にした

聖盃の酒の光りに

立派に拵へた花輪の下に

涼しい眼を輝かして

神酒みぎの光を浴びつゝ

童わらべは魔の圈の中へ入りて

親しく神酒をすゝめるのだ

私は思ふ

『この美はしく輝いてゐる酒を

持つてゐる童わらべは悪魔ではないだらう』

『この聖なる生命の酒を飲め！』

飲んで其教訓を悟り得たら
再びこゝに歸り來て

怪しげな呪文を讀むのをよせ
これ以上無駄に掘るのをよせ
毎日の勤め！ 宵々の接待！

働く日の勞力！ 憩ひの日の宴！
これぞお前が未來の呪文だ』

處世術

お天氣めうへ長上めうへの人の機嫌には
必ず肩まのを輦まのめちやならぬ
それそれに美人の我が儘きま氣儘きまには
必ず心を亂しちやならぬ

漁夫

彼は狂つて躍つてゐる
一人の漁夫は岸に腰を下し
ちつこ浮標うきを見てゐた
心の底まで冷たくしながら
ちつこ耳を欹てゝゐるこ

波は見る間に二筋に割れて
うねる波の間から
女の濡れた姿が浮んで来た

女は歌つて、喋舌しゃべり出した
「何故なぜに私たちの種族等を

人間の才能や計略で
陸へ誘つて殺すのよ？

あゝ 海の底の魚等さかなたちがごのやうに
楽しく生活してるかを御覧になつたらば
あなたもその足で這入つて行つて
健かな生活が出来ませう
お日さまやお月さまでも海へ這入つたら
ほんごに丈夫におなりでせう？
波なみに浸つては殊更に
お顔も美しくおなりでせう？

この空の澄み渡つた深い碧色が
あなたの心を惹きつけて行くでせう？
この永とこしへの露に映つたあなたのお姿が
あなたの心を惹きつけて行くでせう？』
波は狂つて躍つてる
波は漁夫の露あらしはな足を洗つてる
戀しい人に言葉をかはす時のごこ

彼の心は燃わてゐた
女は歌つて喋舌り出した
漁夫は今は逆らふ氣さへなく
よろよろと誘き寄せられ倒れゆき
いつか姿は消え果てた

美はしい花

—囚はれた伯爵の歌—

伯爵

まことに美はしい花を知つてゐる
その花を私は欲しいのだ
訪れて見たいこは思ふても
囚はれの身の悲しさに

わが悩みは果てしない
思ひのまゝに出来た日は
ほんの手許にあつたのに

嶮阻な岩の城にゐて

いくら眺め暮らしても

こんな高い塔からは

何うして花が見へようか

それを目の前に持つて来るものがあつたらば
騎士ナイトや下僕しもべであつたとて
いつまでも恩ある臣こしたいのに

薔 薇

私は綺麗な薔薇の花ですわ
たゞ今この窓の下で聞いて居りますこ
私のこゝを言つて居られたやうですわ
尊い哀れな騎士ナイトさん！

ほんごにあなたは氣高い心の所有者です
それではあなたのお胸に潜んでゐる花は
花の女王クイーンとしての私でございます

伯爵

青い上着を着たあなたの紅色は

ほんごに貴いもの故に

金や貴い飾りご一様に

世の娘たちはそなたを欲しいと言つてゐる

そなたの花輪は更に美しい顔ごなる
だが私が潜かにこの胸で
尊敬してゐるよな花ぢやない

百合

薔薇さんはほんごに高慢で

人を尻にしかうごなさるけご

心やさしく愛を持つ人は

百合の姿を愛で、下さるに違ひない

私のやうな清い心の方ならば
まごころを持つ方ならば
私を最も愛して下さるに違ひない

伯爵

私は清らかな身であつて
何も罪は犯したことはないけれど
寂しくひこり悩んでる
そなたは清い優しげな處女の

美はしい心を現してはゐるもの、
私はまだまだ立派な花を知つてゐる

石竹

それは私ではないですか
私は牢番の庭に咲いた石竹の花ですよ
あの老人は心つくしてごのやうに
私の面倒を見てゐるか？
私の花瓣は綺麗な輪を拵へ

一生豊かな香りに満ちてゐて
いろいろな色の花を咲く

伯爵

石竹は隅に植ゑこく花ぢやない
庭男の楽しい誇りこする花で
ある日は日當りへ抱へ出し
ある日は日蔭の方へ置いておく
だが私の身を幸福に導くは

華かに咲き誇る花でなく
人に知られず小さく咲く花だ

すみれ

私は葉陰に小さく首垂れて
別に話したくもないけれど
今は黙つて聞いてる時ぢやない
日頃の沈黙を破つて申しませう
若しも私がお望みの花ならば

貴い方よ、私の香りをすべて捧げたいけれど
その出来ないので哀れです

伯爵

優しい葦すゐれは私も愛する花なのだ
そなたは謙虚な心で香ばしい
けれど悩みの多いこの身には
まだまだ立派な花が欲しいのだ
今わたしの本當のここを言ふならば

このやうな岩の上の荒れた地面には
私の愛する花は見出せない

しかし向うの小川の邊ほとりには
私がこの牢獄から出るまで
まここある女が往來ゆきして
いつでも哀れに溜息をついてゐる
あの女が小さい青い花を手折りつゝ

『忘れな草よ！』こいふたびに
遠くにも思ひ出す

たゞ二人は離れてゐることも

思つて居れば氣も強い

それなればこそこの暗い牢獄にゐながらも

私は矢張り死にもきれずにゐる譯だ

胸張り裂ける日ですらも

『忘れな草よ！』こいふときは

私はいつも蘇つたやうな氣にもなる

思ひ出

男

あなたは今でもあの時分を覚えてますか
二つの心がひみつになつてたあの時分を？

女

あなたに私は出會でくわさなかつたらば

私はごんなに長い日を送つたでせう

男

二人が出會であつてからは何うでしたらう！
今思ひ出しても心がぞくぞくしますね

女

私共はもう何方どちらも老ひ込んでしまつたわ
思へば美しい時でした

少女の希望

ほんに一人の婚さんを

私にさづけてくれたなら！

ほんこに私は嬉しわ

お母さまご呼ばれたり

お裁縫しごとばかりしてゐたら

學校へ行かずに濟む上に

あれもこれもいひつ吩咐けて

女中を叱つて見たりする

自分の好きな店からは

欲しい衣裳を買つて来て

舞踏會へは缺がさずに

散歩も勝手に出来はする

何も父さまや母さまに

尋ねることもいりはせぬ

朝の悲しみ

お、狡猾な愛しい娘

私がおのやうな罪を犯したか？

こんな私を責めながら

約束の言葉にそむくとは

昨夜はあんなに親しげに

私の手をこり噛いた

『わゝ、吃度明日の朝

あなたの部屋へ行きませう』

だから私は扉とに氣をつけて

すぐに開くやうにしておいた

蝶つがひまでよく調べ

音のせぬのを喜んだ

待ちに待つた夜も過ぎ去つた！

ちよつこは眠りもしたけれど

時間ばかりを数へつゝ

心はいつも覺さめてゐた

いつか私は微睡うたふねから覺さめてゐた

心では闇を祝福してゐた
静かにすべてを隠すあの闇を
天地に満ちた静かさを喜んで
いつも静かさに耳を傾けた
何か音が聞いて来ないか

『私の思つてゐるやうに思つてゐたならば』

私の氣持と同じ氣持でゐたならば
彼女は朝まで待たせずに
この時にやゝて来ようもの』

一匹の猫が屋根裏にかけあがるとき
鼠が隅の方でここここ云はせし
何かしら物音がするたびに
これがそなたの足音だつたら望んだり

そなたの足音ぢやなからうかと思つたのだ
かくて久しい間寝てゐたら

いつか東の空が明るくなつて来て

彼方あつち此方こつちで音をしはじめた

『彼方あつちの戸口か？ こゝの扉とか？』

床に眩つき起き上り

明るい扉口の方を覗き見た

今か今かと開くのを

しかし扉は矢張り元のまゝ

蝶つがひの上にぢつとたてかけてあるばかり

早や夜は明け放れ

もう隣家の戸口も開きはじめ

仕事へ行くよなその様子

それから車も軋り出し

街の門は開かれる

やがて市場の雑音が

騒がしく耳に響くのだ

家の中でも往來ゆきよの足音や

階段を下りたり上つたりするたびに

扉はがたつき階段はみしみし音がする

私はこれでも立派な生活のやうに

私の望みを捨て得ない

ついにはあの憎らしい太陽が

私の窓や壁に入り込む

私は起き上つて庭へ走り出る

私の渴望に燃わした息をもて

清い朝風を濁さうと

きつと庭でお前に逢へよう

しかしお前の姿は繁みの木の間にも
高い菩提樹の並木道にも見ゆやせぬ

夜の思ひ

不幸な星よ、お前たちは可哀さうだ

神や人間に報ひをうけずこも

美はしく氣高く光つてる

困り果てた船乗にその行手を照らすものよ

お前たちは一度の戀すらも知らない！

永久に遙かな天の果てにまで
たゆまず倦ますその群れを導く
如何に遠い旅路を経て来たか！
私が愛する人の腕に抱かれて
夜中にお前たちを忘れた間にさへも。

花 婿

眞夜中に眠つてゐるこ私のこの胸に
晝のやうに愛は覺^さめてゐた
夜明けが日没のやうに思はれる
晝が何を持つて来ようこつまらない。

晝の暑さも厭いとはずに

彼女おれと離れて精出し稼ぐのも彼女のため
しかし涼しい晩は氣も爽かだ！
それだけで一日の勞苦は報ひらる。

日の落ちるさき、二人は手をこつて
最後の惠みを眼　きで言ひかはし
眼と眼を見合はせ斯う云つた

東の方からまた戻つて來ませうね！

眞夜中！　夢で星の光は

彼女の眠つてる部屋へ導いて行く
お、私も今あすこへ行つて寢て見たい
如何に惱み多くとも人生は愉快だ！

『若きエルテルの悲み』の後に

若い男はみな愛が欲しいのだ

娘たちもみな愛が欲しいのだ

あゝ、この私たちの一番神聖な本能から

何うして恐ろしい苦しみが来るのだらう？

彼を愛し彼の爲めに涙をながす心やさしい人た

ちよ

彼の記念を失敗から救はうとする人たちよ

見よ、彼の靈魂は地獄から語るであらう

男子たれ、そして私の眞似をするなよこ。

常に何處にも

山の穴を深く押入つて行け、

空高く雲について行け、

詩神は谷や小川に

繰返しまた呼びかける。

新しく花の咲くごころに

新しい歌が出来てくる。

時は騒しく流ることも

四季は常にめぐつてゐる。

水上の精霊の歌

人間の魂は

水と同じである

天より降り

天に昇り

再び降り

地にかへり

永遠にそれ心繰返してゐる

高い嶮阻な

断崖より

聖なる光を投げ

滑かな岩の表面に

飛び散り

霧こなり

更にそれを軽くして

草の間をちよろちよろこ

谷間へと流れゆく

屹立した岩で

行手をふさがるれば

心を苛立たせて泡立ち

岩より岩に躍り狂つて
淵へこ落ちてゆく

河床の平原は

静かに流れて行き

おだやかな湖上に出れば

その水のおもてには

無数の星が輝いてゐる

風の優しきは

波の愛するところだ

風は逆まく波を

底の底からまぜ返してゐる

人間の魂よ

お前は水と同じだ！

人間の運命よ！

お前は風と同じだ！

永久に

この現世の牢獄の中で

人間が天國を呼んでゐる最上の幸福は

動かすことの出来ない眞の愛である。

疑ふ心のない友情である。

賢い人の孤獨な思ひの中に潜む光明である。

詩人が美しい空想の中に描く光明である。

それを私は自分の最も楽しい瞬間に

彼女の中に探し出して私の所有にした。

人間の限界

神聖で不死の
わが父なる神が
厳かな御手をもて
走つてゐる雲間より
恵みある雷の光を

地上に投げ給ふとき
私はその白衣の
裾に縋つて子供のやうに
たぢろぎながら接吻する

如何なる人間が
神に自分この
心を知り得るか

たご八空に飛んで
星に頭が觸れても
足先は危くも宙に迷ひ
雲ご風ごに奔浪される
たごへ動かぬ
不朽の地上に
丈夫な骨もて

立つて見ても
櫛の木ぐらゐにも
葡萄の蔓ぐらゐにも
高くは延ひるごこの出来ぬ
わが身の悲しさ

神ご人間ごの
限界の差はごうであらう？

神の前に於ては

盡きせぬ河の流れも

たゞ流れては行けぞ

波はいつか彼等をも

押し上げては沈める

小さな一つの柵が

私等の生くる限界をつくる

然もすべての人間は

生存の無窮の鎖に

各自が繋がつてゐる

プロメチウス

ジ・ヨウスよ

雲クモ霧キリをもて

汝キミの天アメを蔽おほへ

然も山上の檜ヒノキの梢エダに

勳イサナをもてあそぶ

童わらべのごごく誇れ!

されど我がこの土地のみは

我が自由なり

汝の建てしものに非ざる我が家も

この竈かまども我が自由なり

この竈の火を見て

汝は我れを嫉妬せり

なんじ神よりも憐れむべきものは

日の下に他にあるまじ！

なんぢは供へ物こ

祈りこにより

我が権力を微かに

保ち維持せるのみ

若し子供こ乞食の如き

祈りにのみすがら弱者なかりせば

なんぢは餓死せん

我が幼かりしとき

如何にも術すべを知らざれば

我が悲しみを聞く耳は

おのが心こひこしく

悩めるものを慈しむ

心のなきかこ日の彼方へ

惑へる視線を投げぬ

威に誇るテイタアンの手より何處に

我れを救ひ出せしものやあらん？

死より奴隸の身より何處に

我れを救ひ出せしものやあらん？

神聖に燃ゆる我が胸よ

これを完成し得たるは悉く汝ならずや？

若く従順なる心を欺かれつゝ

天に眠れるものに何が故に

禮を述ぶらの要やあらん？

何が故に？ 我れ汝を尊敬すべきか？

なんぢ嘗ては重荷に苦しめる者の

苦痛を軽からしめしここありや？

なんぢは嘗て惱める者の

涙を拭ひしここありや？

我れを男子に仕上げしは

我ご汝の主なる

全能の時にやあらん？

無限の運命にやあらん？

我が豊かなる夢想の

すべてを物になす能はずこて

我れ人生を憎しみ

沙漠へ遁れよご汝は宣給ふや？

こゝに我れは座して人間を創造す

我が姿になぞらへし

我れに似たる種族を

苦痛をも嘆きをも

楽しみをも喜びをも

然も汝を崇めぬここをも

我れに似たる種族に

天才的の野心

私は斯うして何時もこの桶を

ヂオゲネスの聖者みたいに轉ころがしてゐる

本氣でしたり戯れにしたり

愛でしたり憎みでしたり

この爲めにしたりあのためにはたり

目的あつてしたり目的もなく

何時も斯うしてこの桶を

デオゲネスの聖者みたいに轉ころがしてゐる

現實と永遠と

日を日で現すは出来ないことだ

それは紛糾を寫すやうなものだ

人間は自らを最も正しいと考へてゐる

自分に鞭を當てずに他人に鞭を當てる

精神が常に高まるときは

唇には沈黙を守るがよい
昨日から今日には移らない
しかし時代は絶えず
盛衰を伴ふであらう

運命

I

運命に抵抗して行くことは出来る
しかも打撃は突進して来る
そこで運命の方で避けないやうなら
さうだ！ おまへ自身で避けたがよい

II

運命に抵抗してはならぬ
併し逃避してもならぬ！
お前が若しも抵抗して行けば
運命は容易にお前を引きつける

最善の道

若しお前の頭と心が惑亂したら
現在の仕事より勝れたところが何うして出来よう！
既に愛も失せ迷ひも失せたら
その人間は墓に入るより他にない

世に處して

生き甲斐ある生活を送るには
過去のことに悩んではならぬ
僅かな愚かなことでも感情を害ふ
故に常に現在をのみ楽しむがいゝ
殊に如何なる人をも憎まず

未來は神の御意にまかせよ

大正十二年二月十五日印刷
大正十二年二月二十日發行

ゲエテの詩集
定價金八拾錢

著者

石 躍 信 夫

發行者

大阪市西區鞠南通三丁目二
藤 谷 芳 三 郎

印刷者

大阪市西區阿波座中通三丁目四番地
井 下 精 一 郎

發行所

大阪市西區信濃橋交叉點西入

崇 文 館 書 店

電話土佐堀三六一九番
振替口座大阪二七八五番

ハイネの詩集
 ハイネの詩集
 デエテの詩集
 ホイツトマンの詩集
 バイロンの詩集
 ヴエルレエヌの詩集

ポケツト形各上質印刷紙印刷
 優美なる絹表紙 幀箱入

尾上柴舟譯
 松山敏譯
 石躍信夫譯
 松山敏譯
 石躍信夫譯
 松山敏譯

(各定價 金八拾錢
 郵税 各至四錢)

圖書出版

大阪市西區靱南通二
 藤谷崇文館

電土三六一九・振阪二七八五

